

日奈久「赤レンガ倉庫」地震で解体

「記憶残し、憩いの場に」

熊本地震で被災し解体された八代市日奈久中町の「赤レンガ倉庫」の跡地を
活用しようと、地元住民と熊本高専八代キャンパスの学生らが動き始めた。倉
庫に使われていた古いれんがを再利用し、小さな広場をつくる計画だ。

地元住民、学生ら 跡地で広場づくり

倉庫は1921(大正10)年
に造られ、広さは約66平
方メートル。放浪の俳人種田山頭
火が30(昭和5)年に宿泊
した元旅館・織屋に隣接す
る。氷室やエビなどの乾燥
場として使い、宿が満室の
際は客を泊めたという。
近年はコンサートなどイ
ベントでも活用されていた
が、地震で壁の一部が崩れ
るなどしたため解体。調査

「調べる。広場整備は同科5年の蔵
原周大朗さん(19)ら4人が



解体したれんがを再利用するため、モルタルなどを丁寧に
はがす熊本高専の学生や日奈久地区の住民ら。八代市

「コンサートなどイベント
会場にも使われた赤レン
ガ倉庫」2005年12
月、八代市



提案。倉庫の壁があった場
所にれんがを積んでベンチ
を作り、面影を伝える計画
だ。

4月中旬に住民有志と学
生らが「日奈久赤レンガ倉
庫跡地を活かす会」を発足。
5月7日には、解体したれ
んがを山積みにした地区内
の空き地に約30人が集ま
り、再利用のための準備作
業に汗を流した。

金づちや平整なげでれんが
から目地のモルタルなどを
丁寧に除去。この日は2時
間半で約1100個を磨い
た。広場整備には2千個が
必要で28日も作業を続け
る。7月以降、れんがを積
む作業に入り、9〜10月の
完成を目指す。

佐藤士郎会長(70)＝同市
日奈久塩南町＝は「れんが
には独特の温かみがあり、
魅力ある広場になりそう。
憩いの場として、山頭火を
しのぶ場所として、生かし
ていきたい」と話している。

(平井智子)